

「本気」の入門係」

主任司祭 晴佐久昌英

昨年、十年ぶりに高円寺教会に戻ってきて一番驚いたことは、メンバーの顔ぶれがほとんど変わっていないことだった。変わったと言えば自分も含め全員そろって十歳年取ったというだけで、「はじめまして」と挨拶をする相手は数える程度。日本の教会の現状を考えれば驚くこともないのだろうが、複雑な心境になった。

どんな理屈をつけようとも、キリストの教会の使命が福音の宣教と洗礼への招きにあることは、誰も否定できないはずだ。迫害下の教会ならいざ知らず、信教の自由の保障されたこの国で信者が一向に増えない理由は、我々が本気で福音を宣教し、本気で洗礼に招いていないからということ以外の何者でもないと思う。

「行って、全ての民を私の弟子にきなさい。父と子と聖霊の名によって洗礼を受けなさい」

イエスのこの要請に応じて弟子たちが命がけで宣教し、四百五十年前にザビエルが来日し、七十五年前にマイエ神父が開いたから、高円寺教会があるのではなかったか。自分が招かれ受け入れられ、救われたのは、誰かが招いて受け入れて、救ってくれたからではなかったか。

傷ついた現代世界が今、必死に探しているのは実はイエスの福音である。宗教心豊かな日本人が今、潜在的に求めているのは実は洗礼の喜びである。教会には世を救う材料は全てそろっている。足りないのはただひとつ、本気で働くキリストの弟子なのだ。以前いた教会では五年間に信者が三割増えた。高円寺教会が本気を出すならば十割増えてもぼくは驚かない。

今年から「入門係」が発足した。現在の五つの入門講座の世話役を中心としたチームだが、これはキリストの弟子として人々を招き、受け入れるチームである。歓待し、相談を受け、受洗に導き、共同体の一員とする。現在八十名の洗礼志願者の世話をしているこのチームは今「本気」であり、ひときわ輝いている。

入門係の最大の喜びは、何と言っても洗礼式での受洗者の笑顔であり涙であろう。司祭にとってもそれは全ての苦勞の報われる瞬間であるわけだが、それは当然、教会全員の喜びでもあるはずだ。本来、全員が入門係だからである。